東　京　国　税　局　長　賞

税と共に歩む私達

西東京市立田無第二中学校　３年　上田　絢子

税についてどう思うか。答えは「ただ払わされているお金。」税についてなんの思い入れもなく、消費税があるおかげで欲しいものがあと１円で買えなかったという経験をたくさんしてきた私にとって、税金はあまり良い印象ではなかった。あの春までは。

一昨年、私は神奈川から東京に引っ越した。入学式で体育館を見回すと、もちろん知っている人は誰一人もいなかった。知らない人に話しかけるのが苦手な私にとって、この状況はとてもつらかった。幼馴染と一緒に撮った写真を見るだけでも、胸が苦しくなった。そんな私でも、友達になってくれた子がいて、ある日その子に「児童館で遊ぼう」と誘われた。それが、私の児童館デビューだった。バトミントンをしていると、職員の方に、少年、少女たちに次々と「一緒にやっていい？」と声をかけられた。戸惑って、「い、いいけど……」と答えてしまったが、本当はすごく嬉しかった。こんなに大勢の人と遊んだのは久しぶりだったから。体育館には、私達の笑い声と、パコーン、パコーンという心地よい音が鳴り響いていた。私は彼ら彼女らの無邪気さに励まされ、明日から積極的に同級生に話しかけに行こう、という勇気をもらった。

様々なものを与えてくれた児童館。児童館とは一体何なのか。それは、国民から集められる税金から作られる、公共施設である。施設の整備に必要な費用の一部は国が出すお金である「次世代育成支援対策施設交付金」で賄われており、その総額は平成 30 年度で約 66 億円。平凡な中学生である私には想像できない額である。児童館はつまり税金によって提供されるサービスといえる。その場は私のような子供達の人間形成の場と、かけがえのない友達、また年代を超えた人と交流する場になっている。税金は、自分の人生を豊かにしてくれる人、もの、感情と出会え、安らぐことができる貴重な場を提供してくれているのだ。

「税」の旧字体「稅」と、今の漢字を見比べてみると、「兄」の上の部分がハからハを逆にしたものに変わっている。二つの線を人とみると、旧字体よりも今の字のほうが人との距離が短くなっているように見える。昔は、税は幕府、皇族などの生活費を得るために徴収されていたもので、民衆、特に農民には殆ど見返りが返ってこなかった。両者には大きな距離があった。しかし今の私達は、税金を納める代わりに医療などの様々なサービスを受けられている。「税」の漢字のように、税を介して皆が寄り添い、助け合う時代になっているのだ。これから私は大人になっていき、いずれ納税をする時が来ると思う。そのときに「納税なんて嫌だ」と思わず、児童館で感じた自分の成長を思い出し「誰かを助けられますように」と思えるような人になりたい。

もう一度自分に問う。税についてどう思うか。答えは「未来を明るくするお金！」